

【エッセイ課題2】民衆映画としての『メトロポリス』

【1】1989年11月、旧東西ドイツ分断の象徴であった「ベルリンの壁」が崩壊した。この歴史的な出来事は、多数の放送メディアによって瞬く間に各国に伝えられた。国境を越えて通りにあふれ、かつての「壁」の上によじ登る無数の人々。一体となって歓喜の声を上げる彼らの姿は、「民衆が団結すること」から生まれるポジティブな力強さを体現していた。一方で、民衆の持つ力にはネガティブな一面もある。世界中至るところでパニックや暴動といった、民衆の「負の力」が生み出す出来事が続いている。このような様々な「力」を生み出す民衆や群衆の姿は、映画でも数多く取り上げられている。パニック映画のように、群衆の動向そのものを描いたジャンル映画すら存在する。

【2】映画『メトロポリス』はSF映画の金字塔といわれている。物語の舞台となる近未来世界の独創性は今なお高く評価されており、後続の作品に多大な影響を与えている。が、この作品で大部分を占めているのは、そういった斬新さだけではない。この映画では、「文明が進んだ（はずの）近未来社会」の中で、昔から変わらない民衆の典型的な姿が描かれている。『メトロポリス』は、SF世界を舞台にした民衆映画なのである。

【3】『メトロポリス』では、さまざまなタイプの民衆を見ることができる。物語の冒頭に登場する労働者たち。彼らは、メトロポリスを支えるため地下世界での過酷な労働を強いられていたのだが、当初はこうした抑圧に対しては従順であった。しかし、機械人間マリアに扇動され、彼らは日々募っていく不満を爆発させ、暴徒と化す。群衆はメトロポリスの心臓部である巨大な機械室を破壊し尽くし、その結果、都市は水没の危機に瀕する。水没していく労働者の町では、大人たちが破壊活動に夢中になっている間、取り残されていた子どもたちが、命の危険にさらされる。子どもたちはパニックに陥り、逃げ惑いながら、地上へ向かう出口に殺到する。一方、地上世界では、支配階級が乱痴気騒ぎを繰り広げている。ここでも機械人間マリアが彼らを扇動し、人々はまさしく自分たちの足元に火がついていることも知らず、忘我の表情で踊り狂う。

【4】このように、何かのきっかけ（機械人間マリアによる扇動、洪水という命の危険）によって人々が群衆と化していく姿は、様々な要素によって効果的に描かれている。たとえば、労働者たちが機械人間マリアに扇動され暴徒化していくシーンでは、扇動者である機械人間マリアと彼女に操作されていく労働者のショットの切りかえしが短い間隔で行われている。ショットが変わるたびに、労働者たちの異なる表情が確認でき、彼らの感情が高ぶっていく様子を知ることができる。また、カメラのアングルも非常に興味深い。労働者たちが、

機械人間マリアに扇動され破壊行動に出る様子が、遠近・上下のカメラ・アングルの使い分けによって、見事に捉えられている。また、クローズ・アップ、ロング・ショットの使い分けによって、人々の動きが個人的でばらばらだったものから全体的でまとまったものへと移り変わっていく様も見てとれる。このようなショットの使い分けは現在のパニック映画でも良く見られる特徴的なものであり、非常に先駆的なものとなっている。

【5】民衆の描き方として、彼らが集団のリーダーに大きな影響を受けている、という描写も興味深い。労働者も支配階級も、機械人間マリアという扇動者によって常に振り回されている。盲目的に彼女に従い、一定方向になだれ込む群衆の様子は、理性をなくした動物の群れのようなものである。また、洪水のシーンでは、子どもたちが主人公のフレダーたちに導かれ、パニックになりながらも出口へと向かい、全員無事に助かる。このように、群衆が暴徒となったりパニックが治まる方向に向かったりと、民衆とリーダーとの深い結びつきも描かれている。

【6】映画の結末では労働者たちと支配階級は和解を果たす。しかし、この結末は本当にハッピー・エンドといえるのだろうか。労働者たちの新しいリーダー：グロートと支配階級のトップ：フレダーセンが握手を交わすと、「頭と手の間に心があるのだ」という字幕が現れる。支配階級（頭）と労働者層（手）が一体となって、一人の人間のように調和の取れた社会を作り上げよう、という意味を示したものだと思われる。しかし、支配階級と労働者層が一体となったところで、結局、そこにはより大きな民衆が生まれるに過ぎない。そして民衆は、愚かなリーダーの存在やパニックによって非常に踊らされやすいものである。そして、この映画では（そして現実においても）こうした民衆の特徴は解決されないままなのである。

【7】結論

このように、1927年に作られた『メトロポリス』はSF映画であると同時に、近未来を舞台とした民衆映画である。しかし、ここで描かれている民衆は、悪のリーダーに振り回され暴徒化したり、パニックに陥ったりしている。そういう意味では、この映画は、民衆の持つネガティブなパワーを警告するパニック映画の先駆的作品とも呼べるかもしれない。それにしても、彼らの姿を見ると、この後のドイツにおけるヒトラーの登場と、彼に対する民衆の熱狂ぶりを髣髴とさせるようで、空恐ろしささえ感じる。私たちは、『メトロポリス』のような歴史的な名作や最近のパニック映画をただ楽しむだけではなく、そこから何か学ぶことがあるのではないか、という視点を持つべきなのかもしれない。

(以上)